

真宗大学の特質

—慶応義塾との対比(上)—

延 塚 知 道

はじめに

この論稿は、『親鸞教学』第六十号に「真宗大学の特質—清沢満之畢生の願い—」と題して発表した拙稿に続くものである。そこでは、一九〇一(明治三十四)年に、東京巢鴨の地に移転開校された真宗大学の「開校の辞」に注目した。初代学監であった清沢満之は、命を賭けて勝ち取った浄土真宗の信念に立って、

本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝へる、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。

(全集・八卷・三五四頁)

と、真宗大学に期待した宗教的真理の学と、それに基づく教育とを表明したのである。ここに明らかなように、満之は、真宗大学を「浄土真宗の学場」と規定し、そこでの学びを「本願他力の宗義に基づく」という。そして、その教育によって生み出そうとする人物像を「自信教人信の誠を尽すべき人物」といい、その全体を、「他の学校とは異なる

りまして宗教学校」であると規定し、真宗大学の特質を表明しているのである。

先の論稿でも尋ねたように、当時の日本は、強力な教育勅語体制下にあり、天皇を神とする擬似宗教を国民全体に浸透させようとしていた。その一國の教育によって生み出そうとした人物像は、「開校の辞」とはまったく違う、天皇に従順な臣民の育成であった。この国家の方針は、単なる文教政策にとどまるものではなかった。そこには、天皇を頂点とした中央集権国家を築こうとする明治政府の強力な意図があった。そのため教育を政治的な力によってとりしきり、それに向けて制度を整え機構を改変するという形で推し進められたのである。明治五年の学制公布、明治十三年の改正教育令、明治十九年の帝国大学令、師範学校令、小学校令、中学校令の公布、明治二十三年の教育勅語の発布等が、その主たるものである。

東京帝国大学を頂点とするピラミッド型の学制と機構の整備は、もっぱら忠良なる臣民を育成しようとする皇国民教育の意図に貫ぬかれたものであった。そこでは宗教教育は当然排除され、教師と教育内容については、国家の管理の下に置かれたのである。したがって教師は、画一的に滅私奉国を教えることとなった。皮肉にも、この忠良なる臣民の教育に順応して良い成績をあげた者は、ピラミッドの頂点である東京帝国大学に進み、エリート官僚となって、今度は滅私奉国を国民に説く立場となるのである。つまりこの学制の整備は、天皇の臣民を育成して強力な中央集権国家を築こうとするものであったが、同時に国民の立身出世を巧みに利用した教育制度でもあった。このような政府の力は、想像を絶するものがあり、宗教学校、特にキリスト教主義の学校への風当りは強かったようである。自らの宗教理念を後退させて政府の意図に従い、ピラミッド型の教育体制の中に入らなければ学生は集まらず、廃校にまで追い込まれる学校も少なくなかったのである。

このような厳しい国情の中で、真宗大学は開校された。清沢満之は、当時の明治政府の高官や帝国大学総長、私立学校々長や他の多くの来賓を前にして、堂々と先の「開校の辞」を表明したのである。現代でも、一大学を設立する

ということとは容易なことではない。まして先述した情況下で、一国の意志である教育勅語に反して、仏教による人間教育を標榜しながら大学として建つということは、気の遠くなるような事である。だから、開学当時の日本の状況についての満之の配慮は、想像を絶するものがあつたと思うが、その当時の現状認識の厳しさというものだけではなかつたと思う。真宗大学は、人類の将来の遙か遠くを見据えながら、「世界第一の仏教大学」たらんとする願いによつて建つた大学であつた。だからこの「開校の辞」は、一方で当時の国情や、他の学校の動向、さらには欧米から押しよせていた近代化という時代の流れを、覚めた眼で透明に見ていたのである。また他方では、遠い人類の未来にかかわつて、いつでも人間に新しい意味を与え人類の帰依処となることができるような宗教的真理を、そこに湛えているのである。

さて、そのような意味を持つ「開校の辞」を手掛かりとして、先稿では、清沢満之の学の特質と、真宗大学開校当時の同志社の動向にスポットを当てて尋ねた。それは、満之が見ていたであろう「他の学校との異なり」の具体性を考えてみたからである。この論稿も同様の趣旨で、当時の慶応義塾の動向と福沢諭吉の学を調べてみるのである。福沢は、欧米の思想による、日本の独立と近代化を担った。そして、それを推進する学問を、慶応義塾に期待したのである。その彼の精神は、現代の日本を築きあげてきた、といつても過言ではない。しかしふり返つてみると、日本の近代化は、多くの大切なものを失なってきたのではないか、という反省も強くある。この論稿は、そのような現代の課題をも視野に置きながら、その出発点ともなった福沢の学の精神を尋ねて、清沢満之のそれとを比較検討してみたいと意図するものである。

一 福 沢 諭 吉

慶応義塾を創設した福沢諭吉は、一八三五年（元保五年十二月十二日）に大阪で生まれ、一九〇一年（明治三十四年二月

三日)に東京で六十六歳の生涯を終えた。それはちょうど、真宗大学が開校される八ヶ月前であった。その生涯は、福沢自身が「一身にして二生あるものの如し」と言うように、徳川時代が三十三年、明治時代が三十三年と、明治維新をちょうどその人生の折り返し点とするものであった。

諭吉という名は、学者肌であった父百助の命名である。諭吉の生まれた日、かねて欲しかった『上諭条例』という中国の法律書が入手でき、嬉びのあまりその一字を取って諭吉と名づけたと伝えられている。儒教でも社会科学の方面の書であることから、この父の影響かまたは時代の要請か、後に蘭学を学び英学を学んだ福沢は、社会科学の関心が特に強く、眼はいつも世界に開かれていた。福沢は当時の日本人としては珍らしく、欧米への渡航歴を三回も持っている。そのため当時の西洋通の第一人者であり、幕末から明治維新後にかけて出版された彼の著書である『西洋事情』は、爆発的なベストセラーとなった。この書物の国民への教育的な効果は絶大なもので、明治政府の当局者達にも多くの啓発を与えたのである。

福沢の一回目の渡航は、一八六〇年に幕府の軍艦咸臨丸に乗って、軍艦奉行木村撰津守の従者としてアメリカに渡った。彼が二十七歳の時であったが、彼自身の強い希望で、つてを頼って強引に撰津守に頼み込み、渡米を実現させたものであった。『福翁自伝』には、氷の入ったワインを飲んだ事とか、ワシントンの子孫の消息のある人に尋ねてみた事とか、アメリカの少女と一緒に写真をとった事とか、帰りにハワイの国王に会った事とか、全体は、のどかで楽しい話で満ちている。サンフランシスコに五十日余り滞在したこの旅は、彼にとって初めての外国であり、『自伝』にアメリカでの心境を、

お嫁さんばかり独り静かにしてお行儀を繕い、人に笑われぬようにしようとして却ってマゴツイテ顔を赤くするその苦しきはこんなものであろう

(『全集』第七卷・九三頁)

と伝えているように、一言でいえば異文化に触れた驚きと戸惑いの連続であったようである。

しかし二回目のヨーロッパへの渡航は、まったく事情が違っていた。福沢諭吉に、国際政治的な観点から見ざるをえないような体験を余儀なく強いることとなったのである。彼は幕府の遣欧使の翻訳方として、一八六二年一月二十二日から一年余りをかけて、フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ポルトガルの六ヶ国を歴遊し、一八六三年一月三十日に、品川に帰着した。アジアの港に寄港しながらヨーロッパへ向ったこの旅は、福沢に西欧烈国の国力の強大さを見せつけたのであった。『自伝』にも

日本の不文不明の奴らが威張りして攘夷論が盛んになればなるほど、日本の国力は段々弱くなるだけの話で、しまいには如何いうようになり果てるだろうかと思つて、実に情けなくなりました。(同・一〇八頁)

というように、攘夷論にうつつをぬかす日本国内の情況や、そのような日本の姿勢では、とても打ちできない欧米の国々との、対外的な地位について深刻に考えさせ、福沢に日本の独立の危いことを憂えさせたのである。

福沢等が日本から最初に寄港したのは香港であった。当時の香港は、アヘン戦争の後の南京条約で、イギリスに割譲されたイギリス領である。彼の日記である『西航記』によれば、港には多数の英国軍艦や砲艦商船等が碇泊し、陸上には英国兵の兵営が築かれ、兵数は三千と記されている。そこは、彼が、日本を離れて最初に見た外国であり、しかも清から割譲されたイギリス領であった。それだけに福沢の印象は強烈で、アジア人の無力さとイギリス人の圧制を見せつけられたのである。彼の日記には、香港の風俗は極めて鼻陋であり、「全く英人に使役せらるゝのみ」(『全集』十九卷・九頁)と書かれている。恐らく福沢の眼には、香港とアジアの小国である日本が二重写しになって見えたのではなからうか。そしてさらに、この強大な国力の差は、一体何によるものであるか、という差し迫った問いを福沢に抱かせることとなったのである。

この福沢が持った問いに対する答えは、パリ、ロンドンとヨーロッパを歴遊していくにしたがつて、しだいに彼の中で熟成され形をとっていくのである。彼は、スエズから初めて汽車に乗りパリを目ざすのであるが、その見るもの

聞くものの全てが、驚きと開眼以外の何ものでもなかった。それを一言でいえば、文明の差である。鉄道や電信に代表される交通通信の発達、昨日の事がすぐに新聞に報道される情報伝達のあり方、大量生産の工業施設、その他枚挙にいとまがないが、どの一つを取っても眼を見はるものばかりであり、幕末の日本ではとうてい考えも及ばないものであった。

しかも福沢にとって驚くべきことは、文明の利器として眼に見えるものばかりではなかった。たとえば、鉄道は民間にまかされているというが、その成り立ちはどうなっているのか。また、街の中のバンクというものの成り立ちはどうであるか。さらには、その科学文明の全体を支え保障している国の成り立ちはどうなっているか。選挙制度というものがあり、それによって選ばれた者の合議で、国の政策が進められるということはどうか等々。福沢は、それらの社会の仕組みを教えられていくうちに、文明国家の社会全体を支えているものは、日本の土農工商というような身分制度などではなく、誰もが堂々と自分の意見を述べ、公明正大な合議の上で事を運ぶという自由さではないか。しかもその自由は、誰もが平等に与えられている人間の権利として、それが法律によって守られているということに気づいていくのである。文明諸国における人々の自由と平等という人間の尊厳は、上から与えられたというような性質のものではなく、その国の人々の一人一人の独立不羈の心に根ざしたものである。その独立の精神が、国民に自由と平等を保障する法律となって結晶し、文明国全体の秩序を保っているのである。福沢諭吉は、このようなことに次第に開眼していくのである。折しも福沢は、ロンドンから、中津藩の島津祐太郎に宛てた書簡の中で、「先ず当今の急務は富国強兵にごさ候。富国強兵の本は人物を養育すること専務に存じ候」(『全集』第十七卷・八頁)と、書き送り、日本の文明開化の根本は、何よりもその独立不羈の精神を教育によって養うことであるというのである。

さて、福沢の三度目の渡航は、一八六七年二月から、再度アメリカを訪れたのである。先回のサンフランシスコでの滞在は五十日余りと日数も少なく、当時のシスコは小都市でもあって、アメリカを垣間見た程度である。しかし今

回は、五ヶ月に渡って東部の諸都市を周ることができ、何よりもヨーロッパを歴訪した眼でアメリカを見たことは、彼にとっても大きな収穫であった。一人一人の能力に応じて自由に職業を選ぶことができるアメリカの社会は、その根底に、個人の自由と平等を尊重する独立不羈の精神があることを学ぶのである。そしてその独立の精神は、遠くアメリカ建国を果し遂げたものであった。だからそれは、日本の置かれている国際的な現状を思うとき、彼がさしせまって第一に学ばなければならぬ精神であった。

福沢諭吉のこのような三度にもわたる渡航経験は、その後の彼の思想に決定的な方向を与えるのである。実際に自分で見聞きした世界の印象は、鎖国時代の日本においては考えてみようもないことであった。彼がこの経験で学んだことの第一は、国家ということである。彼の見た国は、文化や伝統の違いもさることながら、圧倒的な国力の違いによって、弱肉強食という様相を呈していた。第二には、その国力の違いが、サイエンスという学問を基にした文明の進歩の差によるものであった。第三には、その文明の進歩を支えているものは、その国の人々の一人一人の独立不羈の精神であった。このような文明強国の中にあつて、わが日本国は、どのように独立を全うすることができるのか。これがこの三度の渡航経験によって福沢が担った日本人としての彼の責任であった。彼の『文明論之概略』には、

目的を定めて文明に進むの一事あるのみ。其目的とは何ぞや。内外の区別を明にして我日本国の独立を保つことなり。而して此独立を保つるの法は文明の外に求む可らず。今の日本人を文明に進るは此国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明は此目的に達するの術なり。〔全集〕第四卷・二〇七頁と、記している通りである。

しかし当時の日本は、この世界情勢に、あまりにも無知であった。日進の学問を知らず、神州とか万世一系とかに惑溺して、攘夷の嵐が吹き荒れていた。彼がヨーロッパ歴訪中には、薩摩藩士がイギリス人を殺傷した生麦事件が起こっていた。ヨーロッパから帰朝した翌日には、尊王攘夷の志士高杉晋作らが、品川御殿山に建設中のイギリス公使

館を焼き打ちにした。その数ヶ月後には、下関戦争と薩英戦争が始まるのである。このような情況の中で、日本の独立などは気の遠くなるようなことである。しかし彼は、その責任を一身に担いながら、まず日本国民に世界の情勢を知らせねばならない。そのために、『唐人往来』、『西洋事情』、『西洋事情外篇』、『世界国尽』等の多くの著作によって、国民への啓発に力を尽くすのである。

今一つは教育である。『字問のすすめ』では、「実なき字問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」(『全集』第三卷・三〇頁)と、今までの儒学や国学に代わって、西洋の新しい学問、サイエンスを学ぶべきことが推められるのである。その新しい学問によってこそ「身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり」(同・三〇頁)というのである。文明国の独立の基は、何といっても西洋人一人一人の独立不羈の近代精神であった。その精神に比べれば、当時の日本人は、あまりにもお粗末である。「目上の人に逢えば一言半句の理屈を述ぶること能わず、立てと言えば立ち、舞えと言えば舞い、その柔順なること家に飼いたる瘦犬の如し」(同・四五頁)というように、万事お上のいいなりになる日本人の奉公人根性、それを西洋の学問によって立て直そうとしたのである。そして、

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言へり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。

(同・二九頁)

というように、自由と平等とを尊ぶ独立の精神に生きる者を、育てようとしたのである。このように、福沢は、日本の独立を国民教育という形で担い、それに生涯を捧げていくのである。

二 慶応義塾建学の精神

福沢諭吉は、一八五八（安政五）年に、中津藩の命を受けて、築地鉄砲州にある藩主奥平家中屋敷に、蘭学の家塾を開く。これが後の慶応義塾の起源である。しかしこの時には、彼はほんの腰掛くらいのつもりで、この仕事を引受けただのである。しかしヨーロッパ歴訪以後は、日本の独立を賭けた文明開化のために、積極的に青少年の教育に打ち込むことと、著作による国民への啓発を、自らの使命とするのである。三度目のアメリカ渡航から帰ってまもなく、築地鉄砲州が新たに外国人居留地となるため、福沢は多くの借金をして、芝新銭座に、四〇〇坪の土地を購入し一五〇坪の塾舎を建設した。折から明治維新の政変の最中であつたが、この時の年号を取って、この塾を慶応義塾と命名したのである。

この新しい塾の進路は、「慶応義塾之記」に次のように記されている。

今ここに会社を立てて義塾を創め、同志諸子、相ともに講究切磋し、もつて洋学に従事するや、事、もと私にあらず、広くこれを世に公にし、士民を問わずいやしくも志あるものをして来学せしめんを欲するなり。

〔全集〕・十九卷・三六七頁

つまり、これまでの家塾であつた蘭学塾を、西洋風の共立の学塾と改め、その目的は、ひとえに日本の文明開化のためであつて、「事、もと私にあらず」。要するに、自分の私利私欲のためではないというのである。彼は多くの私財を投じていたにもかかわらず、この塾を私物化せずに、一種の団体による公共のための共有物であると、明確に規定した。そして、身分を問わず、意欲ある者は、誰でも一緒に勉強しようと、訴えているのである。さらに福沢はいう。

そもそも洋学のもつて洋学たることや、天然に胚胎し、物理を格致し、人道を訓誨し、身世を営求するの業（中略）これを天真の学というて可ならんか。

（同・三六八頁）

これは後に著わした『学問のすすめ』では、「実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」という実学を表わすものである。さらに「記」では、

こいねがわくは吾が党の士、千里笈を担うてここに集り、才を育し智を養い、進退必ず礼を守り、交際必ず誼を重じ、もって他日世になす者あらば、また国家のために小補なきにあらざ。
(同・三六八頁)

というが、これも『学問のすすめ』には、「身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり」と述べられるものである。とすればこの「慶応義塾之記」に謳われている義塾の目的は、要するに、洋学による「一身一國の独立」というものである。

この学問による独立と同時に、福沢が義塾に期待したもう一つの大切な事は、「進退必ず礼を守り、交際必ず誼を重ず」という、自重の精神である。それは後に、「独立自尊」という慶応義塾の建学の精神を表わす有名な言葉ともなっていくのであるが、その自尊ということである。『福翁自伝』では、

元来私の教育主義は自然の原則に重きをおいて、数と理とこの二つのものを本にして、人間万事有形の経営はすべてソレカラ割出して行きたい。また一方の道徳論においては、(中略)一身を高尚至極にし、いわゆる独立の点に安心するようにしたいものだ。
(『全集』第七卷・一六七頁)

と、義塾教育の目的が二つ挙げられている。それは、西洋の実学と同時に道徳を重んじたいというものである。同じ『自伝』の最後にも彼はこういう。

私の生涯の中に出てみたいと思うところは、全国男女の気品を次第々々に高尚に導いて真実文明の名に恥ずかしくないようにすること(中略)大いに金を投じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにすること。

(『全集』第七卷・二六〇頁)

ここでも分かるように、欧米の人々と対等につき合っていくためには、学問による独立と道徳による自尊、この「独

立自尊」ということが、福沢諭吉の生涯を貫ぬく志願であり、この彼の願いが、後の慶応義塾の塾風を築きあげていくことともなるのである。

明治の初めの著作と教育という福沢の活躍は、日本の国民や政府に多大な啓発を与えるのである。政府では、彼の影響による洋学派が台頭して、明治五年に学制が發布される。しかし、急速な西洋の思想の流入によって、はからずも自由民権運動が起こり、それを押え込むために皇学漢学派の巻き返しが起こり、教育の勅語の發布へと進むのである。周知のように日本は、皇国民教育という、上からの一国の教育に塗りつぶされようとしていくのである。しかし、その中であって当時の私学は、下からの一人の教育に力を尽くすのである。この慶応義塾の「独立自尊」といい、先稿で尋ねた同志社の「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らん事を」という新島の燃えるような人間教育への情熱は立派である。さらには、明治十五年に開校された東京専門学校の「我国に学問を独立せしむるの地歩を為さんと欲する」という、学問の自由を謳った開学の辞といい、いずれも野に立つ私学の面目躍如たるものを感じるのである。

三 「修身要領」制定の事情

(一) 日清戦争後の世相の頹廢

さて、真宗大学開校当時の慶応義塾の動向を尋ねるために、先をいそがねばならない。義塾は、それまでの芝新銭座から、一八七二（明治四年）年、現在の三田に移転した。その後一八九〇（明治二十三年）一月に、義塾は、文学科、理財科、法律科の三科を備えた、大学部を開設したのである。わが国における、最初の私立総合大学であった。

この年は、日本が議會制を敷き、名実共に近代国家として出発した年である。だから、同志社の新島襄も、この記念すべき年を期して、同志社英学校から神学を中心とする同志社の総合大学化を、目指していたのである。しかし、

ちやうどこの年に、新島はこの世の命を燃え尽し、その構想と彼の情熱とは、後進の者達へ受け継がれることとなるのである。私立学校のこのような動向に反して、この年にはまた「教育勅語」が發布され、日本国の上からの教育の方向が、確定した年でもあった。

義塾は、このような年に大学部を開設したのである。しかし内外で期待した程、多くの学生が集まらなかった。なぜなら、従来の教育課程を卒業した学生にも、慶応義塾卒業の名が与えられることから、あえて大学部に進学する者が少なかったのである。この大学部の状況を克服すべく、一八九八（明治三十一）年四月に、義塾は、学園の学制全般にわたって、これまでにはない大きな改革をするのである。それまでは、幼稚舎、普通部、大学部の入学や卒業の時期が、それぞれ異なっていた。また、財政的にも、各々独立していた。それを、幼稚舎六年、普通部五年、大学部五年の教育課程を、一貫した教育体系の下に、整理をし直したのである。さらには、大学部を義塾教育の本幹として、その卒業生でなければ、慶応義塾を卒業した者と認めないこととした。ここに初めて、義塾の一貫教育体制が確立するのである。

しかし、この私立の総合大学としてほぼ形が整った、明治三十一年、この年の十月に、社頭の福沢諭吉は、脳出血のために倒れるのである。幸にしてまもなく回復はするが、病後は再び著書や論説等を書くことはなかった。病に倒れたことで、自らの死期の近いことを覚悟したのであろうか。彼は、この世の最後の力をふりしぼって、慶応義塾の建学の精神である「修身要領」を制定するのである。そしてその「修身要領」に、彼の生涯抱き続けてきた道徳教育への志願を托そうとしたのである。

福沢の目指した教育方針は、すでに尋ねた通り、西洋の実学と道徳とであった。ヨーロッパから帰った頃から彼は、学生の「カラクトル」からたたき直して、その品行を高尙にしたいと考えた。だから彼は、塾の学生達とも談合し、その協力をえて、従来からの塾の風紀を一新しようとしたのである。たとえば、「慶応義塾之記」に定められている

規則の最後には、「右の条々相守、若し不便の事あらば、互に商義しこれを改むべし」とあるように、塾の規則は、単に上から押しつけたものではなく、互いに人格を尊重し合いながらの約束、という意味を持つものであった。明治四年、三田移転にともなうてできた「慶応義塾社中之約束」は、この福沢の精神を継承しながら、実に親切を極めた規則であった。だから、それまでにも当然、義塾独自の塾風は生まれていた。三田の山上で学ぶ者は、義塾の生活を通して一種の気品を身につけ、実社会に出た時には、その高尚清潔な気風を示し広めようとしていたのである。それにもかかわらずこの時期、あえて「修身要領」を制定しようとした意図は、社頭の福沢がなんとか元氣なうちに、慶応義塾を一貫する建学の精神を、文章化してまとめておくということ。同時に、福沢の年来の志願を完うすべく、それを、社会へ道徳運動の形で普及させようとしたのである。それには、先のような義塾の事情だけではない。当時の諸外国との間に置かれていた日本の状況とその世相とが、大きくかかわっていた。ここでそのいくつかに言及しておきたい。

一つは、明治二十八年に日清戦争が終ると、それまで国家を至上とみていた戦時中の考え方に対して、その反動的な風潮が、一気にたかまってきたことである。明治二十九年三月には、文部大臣西園寺公望が、高等師範学校の卒業式で、世界主義教育の方針を演説している。また明治三十一年の八月には、時の文部大臣尾崎行雄は、帝国教育会の集会で、共和主義について演説をしたと伝えられている。また高山樗牛は、当時の雑誌『太陽』で「近代主義」を提唱し、個人の欲望追求を強く打ち出すのである。時の文部大臣が、世界主義、共和主義を唱え、広く社会に影響をもった高山が、近代主義を唱えるというように、この時期、多彩な思想が一気に台頭し、保守派はまたその風潮に対抗するといったように、思想界は混迷を極めたのである。それにもなうて、世相もまた道徳的な頹廢を色濃くしていた。道徳修身の教えは、「教育勅語」があつても、教育界とは違つてその力を失なつたかのようであつた。これより少し後、明治三十四年一月に、清沢満之は、浩々洞より『精神界』を発刊する。それは、親鸞の仏道の信念を世に

公開していく仕事であったが、このような混迷した世相を視野に入れてのことでもあった。

福沢もまたこのような世相を、よく見ていたのであろう。明治二十九年十一月一日、慶応義塾の目的を、次のように述べているのである。

老生の本意は、此慶応義塾を単に一処の学塾として甘んずるを得ず、其目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家処世立国の本旨を明にして、之を口に言ふのみに非ず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを期する者なれば、今日この席の好機会に恰も遺言の如くにして、之を諸君に囑托するものなり。

〔時事新報〕・明治二十九年十一月三日社説・『全集』・第十五卷・五三四頁〕
このように、福沢が慶応義塾の建学の精神である「修身要領」を制定し、それを道徳運動にまでしようとした背景には、一つには、当時の思想の混迷と世相の頹廢とがあり、彼は、それを深く憂えてのことであった。

註、本文中の福沢論吉に関する引文は、全て、『福沢論吉全集』全二十二卷（岩波書店）によって引文し、『全集』と略した。

参考文献

- 『福沢論吉全集』全二十二卷、岩波書店。
- 『福沢論吉』会田倉吉著、吉川弘文館。
- 『福沢論吉』桑原三郎著、丸善株式会社。
- 『福沢論吉』小泉信三著、岩波書店。
- 『評伝内村鑑三』小原信著、中央公論社。
- 『日本近代教育百年史』1・2、国立教育研究所編集。
- 『教育の体系』山住正己著、岩波書店。
- 『教育勅語』山住正己著、朝日新聞社。

『日本近代教育の歩み』影山昂著、学陽書房。

『慶応義塾百年史』上・中・下、慶応義塾。

『早稲田大学百年史』第一卷、早稲田大学。

『東京大学百年史』 東京大学。

『建学の精神』 日本私立大学連盟。